改訂

女子國語新文典

上の巻

K230.82
4g
1

高橋龍雄著

改訂女子國語新文典

東京　株式會社啓成社發兌

改訂女子國語新文典

はしがき

女子の教育において、少しにても理解がましきことを教ふるは、いと困難なることなり、女學校にて國文法の教授のむつかしきもこれが爲に外ならず。殊にこたびの改正は、畫令に比して文法の時間も減りたれば、思ひきつてやさしき教科書を編むにあらざれば、これが教授に苦しむものあるべし。

かるがゆゑに、すべての說き方をやさしくし、誠にわかりよく、憶えやすからしめむ爲に、これが改修に腐心せるところ少ならず。

たとへば動詞の活き及その假名遣の如き、あるは動詞と助動詞のつゞく具合、もしくは形容詞と形容動詞との如きものにおいて、頗る心をこめて、その說明及記述をなせる所は、敎授せらるる人の注意して見られむことを望む。

女子の文章には、體詞をも假名書きにすること多ければ國語假名遣を敎ふる必要あり。新令敎授要目にこれを載せずと雖も、この敎科書には、下卷の附錄としてこれを揭げたり。國語の書き方綴り方と併せて、敎授せらるる便多かるべきを信じたればなり。

大正元年八月二十三日　　高橋龍雄

改訂

女子國語新文典　上卷

目次

第一編　品詞の大要

第一章　名詞……一

第二章　代名詞……二

練習問題

第三章　副詞……四

第四章　接續詞……四

練習問題

第五章　感動詞……六

第六章　助詞……七

練習問題
第七章　動詞……九
練習問題
第八章　助動詞……一〇
練習問題
第九章　形容詞……一二
練習問題
◎復習雜題……一四

第二編　用詞の詳說

第一章　動詞
第一節　四段活—練習……一七
第二節　四段活の音便—練習……二〇
第三節　上二段活及下二段活—練習……二六
第四節　上一段活及下一段活—練習……三三
第五節　變格の動詞—練習……三六
第六節　形容動詞—練習……四〇
◎復習雜題……四六
第二章　助動詞
第一節　受身—可能—使役—敬語—練習……四七
第二節　打消—推量—當然—練習……五一
第三節　時—指定—練習……五四
第三章　形容詞
第一節　形容詞の種類—練習……六〇

第二節　形容詞の口語及音便——練習……六三
◎復習雜題……六六

目次終

改訂

女子國語新文典　上卷

第一編　品詞の大要

ことばの種類を品詞といふ。わが國語の品詞には九種あり。

- 品詞
  - 語尾の變らぬもの
    - 名詞　代名詞
    - 副詞　接續詞
    - 感動詞　助詞
  - 語尾の變るもの
    - 動詞
    - 助動詞
    - 形容詞

第一章　名詞

名詞とは事物の名をあらはす詞なり。

机の上に書物あり。

東京はわが國の首府なり。

右の文中にて「机・上・書物・東京・國・首府」の語は名詞なり。

第二章　代名詞

代名詞とは、名詞の代りに用ひらるる詞なり。

それをここに持ち來れ。

私は貴方にこれをあげませう。

右の文中にて「それ・ここ・私・貴方・これ」の語は代名詞なり。

名詞と代名詞とを併せて體詞といふ。

練習問題

次の文中より體詞を指示し、これを名詞と代名詞とに分けよ。

一　櫻はわが國の名花なり。

二　塗板の上に掛圖があります。

三　ここに硯と筆とインキとあり。

四　あなたは文典を習ひましたか。

五　私は學校でそれを學びました。

第三章　副詞

副詞とは、その下に來る詞の意味を限定する詞なり。

自轉車は早く走る。

櫻の花は誠に美し。

汽車は實によく走る。

月煌々と輝く。

右の文中にて「早く・誠に・實に・よく・煌々と」の語は副詞なり。

第四章　接續詞

接續詞とは、語句または文章を接續する詞なり。

文典および讀本を學ぶ。

春はきぬ。されど、寒さは去らず。

右の文中にて「および・されど」の語は、接續詞なり。

次の文中より副詞と接續詞とを指示せよ。

一　風は寒し、されど雪は降らず。

二　今日は誠によき天氣なり。

三　空青々と晴れわたれり。

四　自動車は甚だ早く走る。

五　我は唱歌および裁縫を學ぶ。

六　よく泳ぐものは水に溺る。

次の文の空所に、副詞(◎◎)・接續詞(△△)を入れよ。

一　今日は◎◎御寒う御座います。

二　昨日は裁縫△△△料理を學びたり。

三　あの子は◎◎母親に似てゐます。

四　春は◎◎來りぬ。△△△寒さは◎◎去らず。

第五章　感動詞

感動詞とは、感動したるとき發する詞なり。

ああ樂しきかな。

さあ參りませう。

右の文の中にて「ああ・かな・さあ」の語は感動詞なり。

第六章　助詞

助詞とは、語の下にありて、他の語との關係を明にする語なり。

我は讀書を好む。

かの人も學校に行く。

わが庭の櫻ぞ咲きける。

日曜なれば友人と公園へ行く。

これこそ彼より勝りたれ。

東京から横濱まで行く。

右の文中にて「は・を・も・に・が・の・ぞ・ば・と・へ・こそ・より・から・まで」の語は助詞なり。

練習問題

次の文中より感動詞と助詞とを指示せよ。

一　鹿を追ふ獵夫は山を見ず。

二　猿も木から落ちる。

三　噂をすればかげがさす。

四　すきこそ物の上手なれ。

五　ああ我が友も遂に逝きぬ。

六　大阪より馬關まで行きけり。

第七章　動詞

動詞とは事物の動作又は所在を表はす詞なり。

花咲く。　鳥鳴く。

山を見る。　ここに人あり。

右の文中にて「咲く・鳴く・見る・あり」の詞は、動詞なり。

次の文中より動詞を指示せよ。

一　よく遊び、よく學ぶ。

二　雨降り、風吹く。

三　習ふより慣れよ。

四　花は散りても、實を結ぶ。

五　空晴れて、雲を見ず。

次の空所に動詞を入れよ。

一　公園にて○○て○○む。

二　書物を○○て○○。

三　蝶は花に○○、蜂は蜜を○○。

四　書を○○、字を○○、又畫を○○。

第八章　助動詞

助動詞とは、主として動詞に添はり、稀に他の詞に添はりて、その意義を助くる詞なり。

人に笑はる。　人に譽めらる。

字を寫さしむ。　速に行くべし。

人の惡を言はず。　蒔かぬ種は生えぬ。

昨日も雨降りぬ。　花は散りたり。

花は咲きけり。　學校に行きき。

學校に行かむ。　われは生徒なり。

右の文中にて「る・らる・しむ・べし・ず・ぬ（口語ない）・ぬ（口語た）・たり・けり・き・む・なり」の語は助動詞なり。

練習問題

次の文中より助動詞を指示せよ。

一　人に笑はるること勿れ

二　人に後指ささしむるな。

三　玉も磨かずば光無からむ。

四　訪ふべしと、彼人は言ひけり。

五　昨日も不在なりきと、人は言ひぬ。

次の空所に助動詞を入れよ。

一　人に譽め○○とも笑は○○こと勿れ。

二　勉強す○○と彼人は言ひ○○。

三　人の惡を言は○と或人は語り○。

四　なさ○と欲せば、なす事を得る○○。

第九章　形容詞

形容詞とは事物を形容する語なり。

山高く水清し。

赤き花咲けり。

親しき友來る。

右の文中にて「高く・清し・赤き・親しき」の語は形容詞なり。

練習問題

次の文中より形容詞を指示せよ。

一　花赤く、水青し。

二　白き花青き水の上に落つ。

三　黑き雲晴れて、月の光清し。

四　牛の歩は遲く、馬の歩は早し。

五　支那は面積も廣く、人口も多し。

次の空所に形容詞を入れよ。

一　水○○風○○。

二　○○友と交れば、○○○友は遠ざかる。

三　○○松の間に○○花見ゆ。

動詞・助動詞・形容詞の三つを併せて用詞といふ。

復習雜題

次の文中より用詞を指摘し、これを動詞・助動詞・形容詞に區分せよ。

一　塵も積れば山となる。

二　背に腹はかへられぬ。

三　死は易く生は難し。

四　栴檀は二葉より香し。

五　衣食足りて禮節を知る。

六　空は晴れぬいざ行かむ。

七　我歸りたりと知らしむべし。

第二編　用詞の詳說

九品詞の中最も大切なるは用詞なり。用詞は語尾の變化する詞にして、その語法甚だ複雜なり。これより順次に動詞・助動詞及形容詞をくはしく說明せむ。

第一章　動詞

第二節　四段活

本を讀まむ。

本を讀みたり。

本を讀む。

本を讀め。

右の文にて「讀ま・讀み・讀む・讀め」は動詞にしてその語尾が「ま・み・む・め」と四段に變りたるを知るべし。語尾の變るを活き又は活用といふ。この活きは必ず五十音圖の同じ行に於てす。

五十音圖

	片假名	平假名
阿行	(ア)列阿	(あ)列阿
加行	カ	か
佐行	サ	さ
多行	タ	た
奈行	ナ	な
波行	ハ	は
麻行	マ	ま
也行	(ヤ)	(や)
良行	ラ	ら
和行	(ワ)	(わ)
	(イ)列伊	(い)列伊
	キ	き
	シ	し
	チ	ち
	ニ	に
	ヒ	ひ
	ミ	み
	イ	い
	リ	り
	ヰ	ゐ
	(ウ)列宇	(う)列宇
	ク	く
	ス	す
	ツ	つ
	ヌ	ぬ
	フ	ふ
	ム	む
	ユ	ゆ
	ル	る
	ウ	う
	(エ)列江	(え)列江
	ケ	け
	セ	せ
	テ	て
	ネ	ね
	ヘ	へ
	メ	め
	エ	え
	レ	れ
	ヱ	ゑ
	(オ)列於	(お)列於
	コ	こ
	ソ	そ
	ト	と
	ノ	の
	ホ	ほ
	モ	も
	ヨ	よ
	ロ	ろ
	ヲ	を

右の五十音圖中括弧をつけたる假名は、決して動詞の語尾とならぬものなり。

五十音圖中最も假名遣の紛はしきは

阿行　波行　也行　和行

の四行なりとす。

又濁音の假名遣にて紛はしきは、佐行・多行の二つとす。卽ち次に示すが如し。

ガ	ギ	グ	ゲ	(ゴ)
ザ	ジ・	ズ・	ゼ	(ゾ)
ダ	ヂ・	ヅ・	デ	(ド)
バ	ビ	ブ	ベ	(ボ)

が	ぎ	ぐ	げ	(ご)
ざ	じ・	ず・	ぜ	(ぞ)
だ	ぢ・	づ・	で	(ど)
ば	び	ぶ	べ	(ぼ)

四段活とは五十音の阿列・伊列・宇列・江列の四段に活くものをいふ。

四段活の動詞は五十音圖中次の六行に活くものとす。

四段活　(阿列)(伊列)(宇列)(江列)

(一)加行　書　か　き　く　け
(二)佐行　增　さ　し　す　せ
(三)多行　勝　た　ち　つ　て
(四)波行　言　は　ひ　ふ　へ
(五)麻行　讀　ま　み　む　め
(六)良行　去　ら　り　る　れ

練習問題

次の語を活用せよ。

1 思ふ。　2 刈る。　3 摘む。　4 押す。
5 打つ。　6 聞く。　7 呑む。　8 走る。
9 咲く。　10 流る。　11 持つ。　12 行ふ。

第二節　四段活の音便

音便とは發音の便利より起れるものにして、これに伊音便・宇音便・促音便・撥音便の四種あり。

四段活動詞の伊列の語尾は音便となる。

（キ）書きて　を　書いて
置きて　を　置いて

（ギ）仰ぎて　を　仰いで
泳ぎて　を　泳いで

右の如く、き・ぎの語尾が、いに代はるものあり。これを伊音便といふ。

伊音便の語に、ひ又はゐなどの文字を用ふべからず。「書ひて」「仰ゐで」など書くは誤なり。

關西地方にては、「推して」を「推いて」、「差して」を「差いて」などいふ伊音便あれど、東京語には存せず。

（ヒ）思ひて　を　思うて
從ひて　を　從うて

右の如く、ひの語尾が、うに代はるものあり。これ

を**宇音便**といふ。

宇音便の語に、ふの文字を用ふべからず。「從ふて」「爭ふて」など書くは誤なり。

（備考）動詞の音便は「て」又は「た」の音に連なる時に起る。波行の動詞にて文章の終となる時は「ふ」と書くべし。「思うて・思うた」は音便なれど、「家を思ふ」又「思ふ事」などいふ時は音便にあらず。

（ヒ）養ひて　を　養って
從ひて　を　從って

（チ）持ちて　を　持って
勝ちて　を　勝って

（リ）去りて　を　去って
取りて　を　取って

右の如く、**ひ・ち・り**の語尾をつめていふものあり。これを**促音便**といふ。

促音をあらはすには、っ文字を側に小記す。

（備考）「ひ」を宇音便に呼ぶは關西語にして、促音便に呼ぶは關東語なり。

例へば

買うて貰うた（關西語）買って貰った（關東語）の如し。

（ビ）飛びて　を　飛んで
悅びて　を　悅んで
呼びて　を　呼んで

（ミ）飲みて　を　飲んで
望みて　を　望んで

右の如く、び・みの語尾を、んにいふものあり。これを撥音便といふ。

撥音便には、む文字を用ふべからず。「飛むで」「讀むで」など書くは誤なり。

以上列記したる所により、四段活動詞の音便の種類を一括して表につくれば、左の如し。

原音	音便
伊音便	き　ぎ　い
宇音便	ひ　び　う
促音便	ひ　ち　り　っ
撥音便	び　み　ん

練習問題

次の文章より、音便を指示して、これを種別せよ。

一　笑って應へず。

二　悦んで歸った。

三　富んで驕らず。

四　一を聞いて十を知る。

五　雨降って地固まる。

六　並んで進んだ。

七　勝ってかぶとの緒をしめよ。

八　馬には乘って見よ、人には添うて見よ。

次の音便の假名の誤れるものあらば正せ。

追ふて行く。　悲むで泣く。　悦んで笑ふ。

書ひて見る。　思ふて見よ。　高く飛むだ。

川を泳ゐだ。

次の問に答へよ。

一　音便の種類をあげよ。

二　四段活動詞の何列の何音が音便となるか。

三　四段活動詞の音便中最も誤り易き者を示せ。

四　東京語と地方語と音便の異なるものを示せ。

第三節　上二段活及下二段活

年老いても衰へず。

年すでに老ゆ。

右の文にて「老い・老ゆ」は五十音圖中也行の伊列と宇列と二段に活きたる動詞なり。

門を出でて月を見る。

山の頂より月出づ。

右の文にて「出で・出づ」は五十音圖中多行の江列と宇列とに活きたる動詞なり。

伊列と宇列とに活くを**上二段活**といひ、江列と宇列とに活くを**下二段活**といふ。

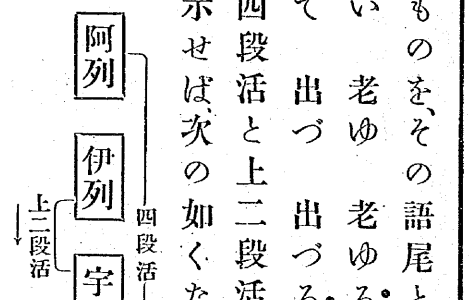
上二段活及下二段活は、なほ宇列に「る」及「れ」を添

へたるものを、その語尾とす。例へば

老い　老ゆ　老ゆる。　老ゆれ。（上二段活）

出で　出づ　出づる。　出づれ。（下二段活）

なほ四段活と上二段活及下二段活との相違を圖にて示せば、次の如くなるべし。



上二段活の動詞は、五十音圖に於て次の六行に活くものとす。

上二段活

(一)加行　起き　くくるくれ

(二)多行　落ち　つつるつれ

(三)波行　生ひ　ふふるふれ

(四)麻行　恨み　むむるむれ

(五)也行　老い　ゆゆるゆれ

(六)良行　懲り　るるるれ

下二段活の動詞は五十音圖のすべての行に活くものとす。卽ち次の表の如し。

下二段活

(一)阿行（得）　えうるうれ

(二)加行　受け　くくるくれ

(三)佐行　失せ　す　する　すれ
(四)多行　隔て　つ　つる　つれ
(五)奈行　兼ね　ぬ　ぬる　ぬれ
(六)波行　堪へ　ふ　ふる　ふれ
(七)麻行　求め　む　むる　むれ
(八)也行　絶え　ゆ　ゆる　ゆれ
(九)良行　枯れ　る　るる　るれ
(十)和行　植ゑ　う　うる　うれ

同じ動詞にて、四段活にも下二段活にも活くものあり。卽ち

立た　立ち　立つ　立て　(四段活)

立て　立つ　立つる　立つれ　(下二段活)

練習問題

次の語を活かせて、その上二段活なるか下二段活なるかを告げよ。

1閉づ。　2失す。　3隔つ。　4恨む。
5譽む。　6飢う。　7生く。　8過ぐ。
9設く。　10起く。　11報ゆ。　12出づ。

次の文中動詞の語尾の假名遣に誤あらば正せ。

一　恩に報ひよ。
二　怖じ恐れて家にかへる。

三　訪ふ人絶へず。

四　教ゆる人に習ふべし。

五　人の惡を言わず。

六　月出ずれば燈を要せず。

七　庭に木を植ゆ。

八　覩れども見へず。

九　飢ゆるものに食を與ふ。

次の語を四段活と下二段活と二樣に活かしめよ。

1 進む。　2 退く。　3 切る。　4 沈む。

5 開く。　6 忍ぶ。　7 延ぶ。　8 滿つ。

第四節　上一段活及下一段活

花を見む。

花を見る人あり。

見れども飽かず。

右の文にて「見・見る・見れ」は五十音圖の伊列にのみ活き、これに「る・れ」の添はりたるものなり、かゝる類の動詞を上一段活といふ。

汽船は波を蹴て行く。

足にて「まり」を蹴る。

蹴れども傷まず。

右の文にて「蹴・蹴る・蹴れ」は五十音圖の江列にの

み活き、これに「る・れ」の添はりたるものなり、これを**下一段活**といふ。

上一段活の動詞の活用は、次の表の如し。この動詞の語數は甚だ少し。

上一段活

(一)	加行	(著)	ききるきれ
(二)	奈行	(似)	にるにれ
(三)	波行	(干)	ひるひれ
(四)	麻行	(見)	みるみれ
(五)	也行	(射)	いるいれ
(六)	和行	(居)	ゐるゐれ

文語の上二段活は、口語にては上一段活となり、文語の下二段活は、口語にては下一段活となる。

文語の四段活・上一段活及下一段活は、口語にてもなほ四段活・上一段活及下一段活なり。

文語	口語
四段活	四段活
上二段活	上一段活
上一段活	
下二段活	下一段活
下一段活	

練習問題

次の語を活用せよ。

1見る。　2率ゐる。　3蹴る。　4似る。
5顧る。　6煢る。

次の語を文語及口語の兩樣に活用せよ。

1借る。　2枯る。　3榮ゆ。　4敎ふ。
5居る。　6受く。　7植う。　8求む。
9過ぐ。　10落つ。

第五節　變格の動詞

變格の動詞には次の四種あり。

加變（來）こき　く　くる　くれ
佐變（爲）せ　し　す　する　すれ
奈變　死　な　に　ぬ　ぬる　ぬれ（ね）
良變　有　ら　り　る　れ

加變・佐變・奈變・良變とは加行・佐行・奈行・良行の變格といふ義なり。

加變の『く』は古文に用ひたる語なり。今文にてはこの場合に來るといふ四段活の語を用ふ。

佐變には漢語の來りて動詞となるもの多し。

勉强す。　敎育す。　散步す。
任ず。　感ず。

など、殆ど數へつくすべからず。

良變と四段活良行と異なる點は、文の終止となる場合にあり。

犬は走る。　ここに人あり。

卽ち良行四段活は『る』の語尾にて文の終止となれど、良變にては『り』の語尾にて終止となる。なほ詳しくは次卷に述ぶべし。

文語の加變は、口語にても加變なり。但し『く』といふ活用なし。

文語の佐變は口語にても佐變なり。但し『す』といふ活用なし。

文語の奈變は、口語にては奈行の四段活となる。卽ち『死ぬる・死ぬれ』の活用なし。

文語の良變は、口語にては良行の四段活となる。卽ち『る』の語尾にて文の終止となるなり。

文語の奈變（口語の四段活）は撥音便となる。卽ち『死にて』を『死んで』といふが如し。

文語の良變（口語の四段活）は促音便となる。卽ち『ありて』を『あって』といふが如し。

（本書第十八頁四段活の音便參照）

練習問題

次の變格動詞を活用せよ。

1 養育す。　2 運動す。　3 裁縫す。
4 禁ず。　5 散ず。　6 來。
7 往ぬ。　8 居り。

次の文語を口語に改めよ。

一　こゝに本あり。
二　毎日人來る。
三　死ぬる人多し。
四　毎朝運動をす。
五　字を書きて居り。

第六節　形容動詞

良變には形容詞の來りて動詞となるものあり。

これは善からず。
これは善かりき。
これは善かり。
これは善かるべし。
これは善かれども價高し。

右の文にて「善から・善かり・善かり・善かる・善かれ」といふ語は、もと形容詞の善くといふ語が、良變と結合して成れる語なり。これを**かり活**といふ。

月明ならむ。
月明なりき。

月明なり。
月明なるべし。
月明なれば、星見えず。

右の文にて「明なら・明なり・明なる・明なれ」といふ語は、もと副詞の明にといふ語が、良變と結合して成れる語なり、これをなり活といふ。

月皎々たらず。
月皎々たりき。
月皎々たり。
月皎々たる夕に遇ふ。
月皎々たれども、訪ふ人もなし。

右の文にて「皎々たら・皎々たり・皎々たり・皎々たる・皎々たれ」といふ語は「皎々と」といふ副詞と、良變と結合して成れる者なり、これをたり活といふ。

以上の「かり活・なり活・たり活」の三つを併稱して**形容動詞**といふ。

なり活及たり活といふ一品詞と、助動詞のなり及たりとを混同すべからず。

この花は美麗なり。
これは櫻の花なり。
これは美麗なる花なり。
河内の國なる大河なり。

風雨蕭々たり。
かれは學生たり。
學校に行きたり。
燦然たる光を放つ。
螢に似たる光を放つ。
學生たるものは、行を正しくすべし。

右の文にて、單線を附けたるは形容動詞にして、圏點をうちたるは助動詞なり。

練習問題

次の文より形容動詞を指示せよ。

一　盛んなるものは久しからず。

二　これは完全なる手本なり。
三　日本の櫻花は美麗なり。
四　堂々たる議論をなす。
五　更に異なる所なし。
六　稀なるものは必ずしも宜しからず。
七　騎馬の兵士は意氣揚々たり。

次の文中より形容動詞と名詞及助動詞とを區別せよ。

一　學者たるべき人少なし。
二　鐵中の錚々たる者なり。
三　これは筆なり、鉛筆ならず。

四　彼は完全なり、此も不完全ならず。
五　見たることあれど、食ひたる事なし。
六　彼もし堂々たらずとも、我は從容たらむ。

◎復習雜題

次の文中より動詞を指摘し、その何段活に屬するかを告げよ。

一　稼ぐに追付く貧乏なし。
二　よく泳ぐものは水に溺る。
三　朱に交はれば赤くなる。
四　驕るものは久しからず。
五　視れども見えず、聽けども聞えず。

六　身を立て道を行ひ、名を後世に揚ぐ。
七　金剛石も磨かずば、玉の光は添はざらむ。
八　人も學びてのちにこそ、誠の德は顯はるれ。

第二章　助動詞

第一節　受身　可能　使役　敬語

(一)人に尊ばる。
(二)人に譽められる。
(イ)行かば行かる。
(ロ)受けば受けられる。

右の文にて、(一)のる、(二)のらるは受身の助動詞にして、(イ)のる、(ロ)のらるは可能の助動詞なり。

受身と可能との助動詞は、その形全く同じければ、文章の意義の上にてこれを區別すべし。

受身及可能の助動詞の活きは次の如し。

受身	れ	る	る	るれ
可能	られ	らる	らる	らるれ

家を興さす。

名を揚げさす。

家を建てしむ。

右の文にてす・さす・しむは使役の助動詞なり。而して、その活きは次の如し。

使役	せ	す	する	すれ
	させ	さす	さする	さすれ
	しめ	しむ	しむる	しむれ

又可能と使役との助動詞は、敬語となる場合あり。

君は、よく歌を讀まる。

先生は、われらを教へらる。

わが師は、よく字を書かせたまふ。

將校は、兵士に案内せさせたまふ。

殿下は、御成績優等にて賞狀を得しめたまふ。

などは、皆可能及使役の助動詞と同じ形にて、敬語の助動詞となれるものなり。

練習問題

次の中より、受身・可能・使役の助動詞を指摘せよ。

一　人に後指さるな。
二　字を寫さしむ。
三　渡らば渡らるべし。
四　人にあがめらるる身となれ。
五　人に新聞を讀ませて聞く。
六　大工に家を建てさせて、家族を住ましむ。

七　負傷兵は、赤十字社病院に送られたり。
八　盜賊に忍び入られて、衣服を盜まれたり。

次の文を敬語體に改めよ。

一　殿下は花を見る。
二　國王は遊獵を好む。
三　知事も臨場す。
四　母は音樂を嗜む。
五　殿下は公衆の歡迎を受く。
六　わが師は能書にて善く字を書く。

第二節　打消　推量　當然

決して人を誹らず。

音樂は未だ學ばざりき。

右の文にてず及ざりは打消の助動詞なり。而してその活きは次の如し。

打消（ず　ぬ　ね／ざら　ざり　ざる　ざれ）

雨も降るらむ、風も吹くらむ。

右の文にて、らむは推量の助動詞にして、その活きは次の如し。

推量（らむ　らめ）

危き所には近寄るまじ。

師の教をよく守るべし。

命令には從はざるべからず。

右の文にてまじべし及べからは當然の助動詞にして、その活きは次の如し。

當然（まじく　まじ　まじき　まじけれ／べく　べし　べき　べけれ／べから　べかり　（べかる）　（べけれ））

練習問題

次の文中より打消・推量及當然の助動詞を指摘せよ。

一　蒔かぬ種は生えね。

二　わけを知らねば面白からず。
三　道行はれざれば去るべし。
四　雨や降るらむ、風や吹くらむ。
五　行ふまじき事は、行ふべからず。
六　金剛石も磨かずば、玉の光は添はざらむ。

第三節　時　指定

時に現在と過去と未來とあり。現在は動詞のままにして、過去と未來とは助動詞を以てあらはす。

花を折りつ。

花散りぬ。
花咲けり。
花咲きたり。
きのふも行きけり。
刺繍は未だ學ばざりき。

右の文にてつ・ぬ・り・たり・けり・きは過去の時をあらはす助動詞なり。

明日も學校に行かむ。
遠き慮なくば近き憂あらむ。

右の文にて、むは未來の助動詞なり。

過去及未來を示す助動詞を併せて時の助動詞

といふ。その活は次表の如し。

時	(て)	つ	つる　つれ………
	(な)	(に)	ぬ　ぬる　ぬれ……
	(ら)	り	る　れ……
	たら	たり	たる　たれ……
	(けら)	けり	ける　けれ……
	き	し	しか……
	む	め	……

過去

未來

かの人は學者なり。

君の尋ねられしはこれなり。

字を書くなり。

美しきなり

かの人は才女たり。

我は我たり。

右の文にてなり及たりは指定の助動詞にして、その活きは次の如し。

指定	なら	なり　なる　なれ
	たら	たり　たる　たれ

指定のなりは名詞・代名詞・動詞・形容詞に付く。而して指定のたりは名詞・代名詞にのみ付く。動詞につく時のたりと混ずべからず。

なり及たりの指定助動詞と、形容動詞のなり活

及たり活とは、その語尾同じければ、混同せざるやう注意すべし（本書第四十三頁參考）

練習問題

次の文中より時及指定の助動詞を指摘せよ。

一　煩しければ、省きつ。
二　尋ねしかども、見當らざりき。
三　庭の櫻はすでに散りけり。
四　花の散れる庭に雨は降りぬ。
五　ありし昔にくらべ見む。
六　君君たらずとも、臣は臣たるべし。
七　これは桃の花なり、櫻の花にあらず。

次の文中より助動詞を指摘し、これを受身・可能・使役・打消・推量・當然・時・指定に種別せよ。

一　岸の姫松幾代へぬらむ。
二　舊りぬるものは、わが身なりけり。
三　行かしむべかりしを、行かせざりき。
四　人に尊ばれむと思はば、まづ德を修むべし。
五　空は曇りぬ、雨や降るらむ。
六　花をながめつる人は去りにけり。
七　行くべきか行くまじきかを考へぬ。
八　行かむか退かむかと迷ひたり。
九　昨日は雨天なりしが、明日は晴天ならむ。
十　そは余が學生たりし時に、聞きたる話なり。

第三章　形容詞

第一節　形容詞の種類

川淺くば渉らむ。

この川は淺し。

淺き川は渉らるべし。

川淺ければ渉る。

右の文にて「淺く・淺し・淺き・淺けれ」は形容詞にして、これを**久活**といふ。

梨の花は美しくはあらず。

櫻の花は誠に美し。

美しき花は八重の櫻なり。

花は美しけれども、匂は少なし。

右の文にて「美しく・美し・美しき・美しけれ」は形容詞にして、これを**志久活**といふ。

久活・志久活の「く」語尾は動詞良變ありと合して、形容動詞のかり活となること、前にいへるが如し。

形容詞の活きを表に作れば、次の如し。

高	く	し	き	けれ（久活）
悲	しく	し	しき	しけれ（志久活）

單に形容詞といへば久活・志久活の如く語尾の

活用あるものをいふ。

されば「赤き・白き」などは形容詞なれど、「緑・紫」などは形容詞といふべからず。

緑なる葉あり。　葉は緑なり。

紫なる布あり。　布は紫なり。

右の文例にて、單線を附けたる語は形容動詞の『なり活』なり。

練習問題

次の文中より形容詞及形容動詞を指摘せよ。

一　山高く、水清し。

二　價安ければ、買ふべし。

三　水は青く、花は紅なり。

四　美しき櫻の花咲きぬ。

五　面白き事もあれば、悲しき事もあり。

六　花に赤きものと白きものとあり。

七　黄なる花はあれど、黑き花はなし。

八　苦しき目に遭ひたれど、悲しからず。

九　この川は深けれど、かの川は深からず。

第二節　形容詞の口語及音便

形容詞の「く」の語尾は宇音便となり、「し」又は「き」の語尾は口語「い」となり、「き」は伊音便となる。

形容詞の文語及口語を對照すれば、次の如し。

高	く（ウ）	し（き（イ））	けれ（文語）
	く（ウ）	い（い（イ））	けれ（口語）
樂	しく（シッ）	し（しき（シイ））	しけれ（文語）（表中片假名は音便なり）
	しく（シッ）	い（い（イ））	しけれ（口語）

文語にて「く」の語尾が宇音便となるときは、多く「して」の語につゞくものとす。

山高うして水清し。

風冷しうして暑さを知らず。

宇音便は又口語にも用ひらる。

寒う御座います。

冷しう御座います。

なほ形容詞の文語・口語對照の文例を示さむ。

風寒し。　風が寒い。

風冷し。　風が冷しい。

白き紙あり。　白い紙がある。

美しき花咲く。　美しい花が咲く。

練習問題

次の文中より形容詞の口語及音便を指摘せよ。

一　山青くして花燃えむとす。

二　川深うして渉るべからず。

三　青い松の間に、赤い花が咲いた。
四　美しき花にも恐しきとげあり。
五　冷しい風にあたるのが樂しい。
六　ひもじい時にまづいもの無し。

次の文中の形容詞と副詞とを區別せよ。

一　よく遊びよく學ぶ。
二　これもよく彼もよし。
三　見るも面白く、聞くも樂し。
四　誠に面白う御座いました。
五　牛の歩は遲く、馬の歩は早し。
六　誠に遲くなりて濟みません。

復習雜題

次の問に答へよ。

一　動詞の活きに幾種類あるか。
二　變格動詞の活きを示せ。
三　形容動詞の種類を問ふ。
四　助動詞の種類を列記せよ。
五　時及當然の助動詞の活きを示せ。
六　形容詞の種類及活きを示せ。
七　動詞及形容詞の音便を列記せよ。

次の文を品詞に分かて。

一　美しき　花　咲き　ぬ。

236
240

K2308

二　更に　知らざりけり。
三　それは　面白かるべし。
四　譽らるとも　誇らず。
五　嗚呼　今年も　遂に　暮れたり。
六　言ふは　易し。されど　行ふは　容易ならず。

改訂
女子國語新文典　上卷をはり

明治三十七年十月十七日　初版印刷
明治三十七年十月十七日　訂正再版發行
明治三十八年十二月廿一日　訂正三版發行
明治三十三年三月十二日　訂正四版發行
明治四十三年三月二十日　訂正五版發行
明治四十四年十一月十八日　訂正六版發行
明治四十四年十一月十二日　訂正七版發行
明治四十二年四月十二日　訂正八版發行
明治四十三年十一月十四日　訂正十版發行
明治四十四年十一月十一日　訂正十一版發行
大正元年十二月二十七日　訂正十二版發行
大正元年十一月二十日　訂正十三版發行
大正元年十一月六日　訂正十四版印刷
大正元年十一月二十日　訂正十五版發行

不許複製

著作者　高橋龍雄
東京市日本橋區本銀町三丁目二番地
發行兼印刷者　株式會社啓成社
代表者　專務取締役　遠藤國次郎
印刷所　東京市神田區表神保町二番地　弘文堂
發行所　東京市日本橋區本銀町三丁目二番地　株式會社啓成社
振替口座東京二〇五五番
電話本局二一〇〇番

改訂女子文典奥付
上卷定價金十八錢